

# 地域ぐるみで行う子ども子育て

竹 中 英 泰

旭川ウェルビーイング・コンソーシアムは平成二〇年五月に発足、平成二四年四月から一般社団法人として、大学間連携による教育の充実と地域振興を掲げて活動を続けている。「私の未来プロジェクト事業」を平成二六年度から行っている旭川市子育て支援部は、平成二七年度には事業の拡大を図って、コンソーシアムに事業を委託した。事業の柱は二つ、「性・命の誕生」をテーマとする小

中学校への出前授業、及び職業体験等を通して「私の未来」を考える機会をつくること、いずれの場合にも大学生スタッフの参加が条件となっている。

旭川市がこの事業を始めた直接の動機は、他都市と比べて高い人工妊娠中絶率にある。そこで一〇〜二〇年後を見据え、助産師や大学生が参加する体験的授業も加えて、子どものうちから「性・命」や「私の未来」を考える機会を増やし改善を図るとしている。スタッフとして大学生や赤ちゃん（後述）が参加することで、いわば地域ぐるみの子ども子育てともなっている。コンソーシアム側からは、児童福祉専攻の教員・学生（旭川大学保健福祉学部）、地域看護学・保健師コース専攻の教員・学生（旭川医大）、家庭科教育専

攻の教員・学生（北海道教育大学旭川校）が参加して、市と協働のかたちで事業を進めている。

昨年の場合、申込を受けた小中学校のいずれに対しても学年単位の授業を行った。例えば三クラス・九〇名の中学校の場合、午前の二コマを使う。前半は全員が多目的教室などで助産師の講話を聞き質疑の時間もある。その間に募集に応じた二〇組ほどの親子（三歳未満児）が集まってくる。生徒達がそれぞれのクラスに戻ると、今度は各クラスに五〜六組の親子（三歳未満児）と大学生スタッフに参加して体験授業となる。クラス内では、十

数名の生徒と二〜三組の親子の交流が二〜三名の大学生スタッフのサポートのもとに進められる。担任の教師、助産師、市の保健師、大学生の指導教員等が見守るなか、赤ちゃんを抱っこしたりして交流が進む。生徒からの質問が終わるとお母さん達からは妊娠・出産・子育てのあれこれが熱心に語られる。なにより泣いたり笑ったりの赤ちゃんパワーが集まったみんなを微笑ませている。

小学校の場合は、講話後十数名ずつに分かれたグループ毎に、大学生スタッフのリードのもと、講話のなかで助産師が使った胎児人

形や新生児人形、骨盤模型等に触れる体験学習が始まる。市の職員・保健師が二枚の毛布をつないで作った「産道トンネル」などを体験することで知識の理解が深まっていく。

高校での授業は、男女ベアの大学生スタッフが母子保健係の窓口に相談に来る寸劇仕立てのシーンから始まる。保健師の受け答えなどシナリオに沿って進められ、出産（あるいは中絶）などをめぐる会話や体験談を含むやり取りはインパクトが強く、児童生徒のみならず高校生の「私の未来」を決める一助となるものと思われる。母子保健係の現場体験を踏まえたシナリオは説得力に富む。

年間の行事予定に入れる小中学校は増えてきて、平成二七年度には小学校一六校、中学校一〇校、高校二校で実施した。受け入れる学校側の評判もよく、参加する大学生にはフィールドワークともなっている。子育て中のお母さんは、自らの出産・子育ての思いを伝える機会、あるいはママ友を増やす機会として積極的に参加いただいている。

事業を申し込む学校側・児童生徒たち、スタッフ参加をする大学生や指導教員、募集に応じる親子のそれぞれがいわば「総活躍」している。なにより小さい時から「性・命」や「私の未来」について身近に学ぶ児童生徒達の成長が、「地域社会の未来」を豊かにすることに期待している。

へたけなか ひでやす・旭川ウェルビーイング・コンソーシアム統括コーディネーター／旭川医大非常勤理事（社会貢献・地域連携担当）／旭川大学名誉教授